

一般に文学の源流は呪的・宗教的儀礼にあるとか、労働にあるとかいわれるが、日本文学の場合も例外ではない。しかしそれは具体的にはどんな儀礼や労働かということになると、あまりはつきりせず、抽象論に終わっているのが現状である。私の考えでは春のはじめ、村人たちが山に登って、花や青葉の枝を折り、春菜を摘んだり、柴刈りをすると共に、飲食・歌舞・性的解放に一日を遊び暮らす行事、今日の「花見」「山行き」の民俗行事に類するものが、そのもっとも大きなものであったと考える。

これは予祝、労働、娯楽の三つの性格の混融した行事で、初めに花見、国見をするのは予祝的な意味を持つものであり、従って後には天皇がこの国見だけを独立の行事として行なうようになった。記紀・風土記・万葉に見える天皇国見の歌謡や物語はそれである。民間行事ではその時、山上から自分の故郷や恋人のすむ家の辺を望んで懐しむ歌が歌われ、この種の歌も記紀歌謡の中に見出されるだけでなく、万葉の宮廷儀礼歌、叙景歌、旅の歌の中には、この国見歌

や国見的望郷歌の発想に基づいて歌われているものが多い。

花見・国見に続く飲食・歌舞・性的解放の行事は「歌垣」と呼ばれている。それは娯楽であると共に若い男女の婚約の行事でもあったから、そこで歌われるのは男女の



「古代歌謡と儀礼の研究」

土橋 寛

誘い歌を中心として、明るい興奮的な気分にみちたものが多い。記紀・風土記にはこの歌垣の歌が数多く含まれ、万葉の相聞歌はこの歌垣の歌の性格を受けついでいる。

物語の祖といわれる竹取物語や、民話の中心をなす柴刈爺の話の、山に柴刈りに行って幸福を授かるというモチーフも、この

春山入りの予祝的観念を説話化したものであり、歌だけでなく物語の世界も、この行事が重要な源泉を提供している。

私のこんどの研究は、記紀・風土記などの文献を資料として、古代の春山入りの行事（それとの関係で宮廷の正月行事、鎮魂祭、御神楽にも触れる）と古代文学とくに歌謡との関係を明らかにしようとしたものである。つまりマーセル・グラナーの「支那古代の祭祀と歌謡」で取扱われているのと同じ問題を扱っているわけであるが、方法の上で、現在の民俗及び民謡との比較ということを重視している点が、グラナーの研究と異なる点であり、また部分的な問題とはもかくとして、「歌垣」が「花見」「国見」という呪術的行事と合体した形で行われたとする点も、グラナー及びわが国の学者の歌垣の研究と異なる相違点である。国見の歌、歌垣の歌と万葉の創作性との文学史的考察、春山入りと物語との関係について、文学史的な問題を考える手がかりだけは、簡単なが示しておいたつもりである。

（文学部教授、文学博士、日本文学史）